

もくじ Contents

3 特集

わたしたちができる
防災対策

8 市政だより

- 健(検)診を受けましょう
- 国民年金保険料の免除・猶予制度
- 下水道工事箇所
- 住宅用太陽光発電システム設置補助
ほか

12 ふおとほっとるぼ

- グラスハウスリニューアルオープンほか

14 みんなのページ・ちゃい

- お・た・よ・り
- つやまっ子に贈る100冊の本
- きらめく津山人
- イラスト・絵手紙
- 広報クイズ
ほか

17 としょかん

18 こどもひろば

- 津山キッズ将棋教室
- じどうかん

19 けんこう・そうだん

20 けいじばん

26 くらし

28 Albumあの頃の津山

箕作阮甫は、娘婿の省吾を病気で亡くした後、弟子の菊池秋坪を次の養子に迎えました。今回は、その秋坪の生い立ちについて紹介しましょう。

文政8年(1825)12月、秋坪は備中国下野部(現在の真庭市下野部)にあった学校「教諭所」で、学監(副責任者)をしていた菊池文理の二男として生まれました。地域を回って人々を教化していた文理は、温和な人柄で尊敬されていたといえます。ところが、秋坪が13歳の年、文理は39歳の若さで亡くなってしまいます。秋坪の兄も早くに亡くなっていたため、秋坪と母と妹は地域の人々に支えられながら、そのまま野部で暮らすことになりました。

天保12年(1841)、17歳になった秋坪は、父の友人であった津山藩に仕える儒学者・稲垣研嶽に引き取られ、津山へ移り住みます。そこで漢学の基礎を習得すると、父と研嶽の師匠である儒学者の古賀侗庵を頼って江戸へ上り、儒学を学ぶことにしました。

しかし、この頃は相次ぐ外国船の来航で蘭学の需要が高まりつつあり、時勢を察した侗庵は秋坪に蘭学を学ぶよう勧めます。こうして弘化3年(1846)、22歳の秋坪は阮甫に教えを請うことになったのです。

阮甫の下で勉学に励んだ秋坪は、その向学心を見込まれて阮甫から養子になるよう勧められました。嘉永2年(1849)、秋坪は大坂にある緒方洪庵の適塾に入門します。適塾の記録には「箕作阮

洋学博覧漫筆

～ 箕作秋坪の生い立ち ～

甫の養子」と書き添えられているので、この時には、もう養子の話が内々に決まっていたのでしよう。阮甫と洪庵は、宇田川玄真の下で学んだ兄弟弟子だったので、阮甫も信頼して洪庵に秋坪を託せたのです。この頃に阮甫が秋坪に送った手紙には、しっかりと勉学を修めることを願った、温かい言葉が綴られています。

嘉永4年(1851)、2年間の修業を終えて無事に江戸へ戻った秋坪は、阮甫の三女つねと結婚し、新進の医師として活躍を始めます。そのわずか2年後、浦賀にペリーが来航し、日本は開国への道を歩み始めます。そして秋坪も、その時代の流れに直面していくことになるのです。



▲箕作秋坪(津山洋学資料館所蔵)